

訳者あとがき — 訳語に関する注解とともに —

1. 本資料に掲載した7つの論稿のうち、訳出した6つの論文の原文は以下のものである。
 - 1 United Nation Statistical Division(2004)“Follow up for the Q2004 Satellite Conference on data quality for international organizations”
 - 2 Ivo Havinga,Gisele Kamnou,Stefan Schweinfest and Willem de Vries(UNSD)(2004) “Squaring the quality circle – towards a quality framework for International Statistics”
 - 3 Enrico Giovannini & Denis Ward(Statistics Directorate,OECD)(2004)“ Quality framework for OECD statistics getting our own house in order”
 - 4 Haishan Fu (Human Development Report Office,UNDP)(2004)“Data consistency, statistical credibility and the Human Development Report”
 - 5 Neil Fantom(Development Data Group, World Bank)(2004)“ Introducing a PARIS study of the international statistical system in relation to MGD indicators – “Monitoring the Millennium Development Goals:current weakness and possible improvement”
 - 6 Enrico Giovannini(Chief Statistician of the OECD)(2004) “Towards a common strategy of international organizations to improve the quality of international statistics”.

このうち、1～5はQ2004の詳細を(Q2001にもふれて)伝えている Federal Statistics Office Germany のサイト ([//q2004.destatis.de](http://q2004.destatis.de)) でQ2004へ、この画面の下端にリンクを示してある2004 Satellite Conferenceに掲載されている。E.Giovanniniの6はCCSAの第4回会議(2004年9月、ニューヨーク)で提出されたペーパーである。googleにSA/*****を入れてでてくる最初の論文として取り出せる。

第一に、Q2004のSatellite会議の概要を把握するために1を、第二に、国際統計の品質枠組みをめぐっての論議の概略を把握するために2.3を、第三に、国際機関が国際統計をめぐって抱えている問題を現実の問題の側から具体的に把握するために、特に人間開発報告書の執筆にかかわっている事務局とミレニアム開発目標の統計に関しての世界銀行からの報告をとりあげてみた。世界・各国人口が機関別に異なって存在しているため、1人当たりで各種統計指標を作成する上で困難に直面することなどが伝えられている。第四に、国際統計の品質枠組みに関して5月のこのサテライト会議での論議から更に進んだ、包括的論文としてE.Giovanniniの8月段階のものをもとりあげた。

2. 訳者はこれまで統計に関わる重要な報告や論文について、本統計研究参考資料や『研究所報』で翻訳あるいはコメントしてきた。これまでは原論文の執筆者からの翻訳許可はレターやe-mailで比較的短期にとりつけることができたが、今回はかなり時間がかかった。

基本的にはレターによる要請を経てはじめて、レターあるいは e-mail による返答で、了承をとりつけた。これに半年以上時間を費やした。最終的には、UNDP と世界銀行からの論文を、それぞれ UNDP と世界銀行のそれぞれ東京事務の仲介を経て翻訳許可をいただいた。両機関の東京事務所に感謝したい。そしてそれぞれ貴重な論文の翻訳を承諾していただいた原著者の皆さんには深く感謝したい。なお、翻訳許可を求める際に、原論文の不明点と誤記は問合せ、訳文では修正してある。この遅れもあって、本冊子の 7 として、筆者が属している経済統計学会の全国研究総会でのセッションでの報告を収録することになった。

3. 訳者は、現在統計の品質としてとりあげられている諸論点・論議・視角は、統計活動や統計研究の根本に据えられるべきであると考えている。訳者は、日本の社会統計学で、政府統計の理解・吟味・批判および統計制度論を統計学の理論の中に位置づけるべきであることをめぐって、長くにわたって 1970 年代いっぱいまで行われた論議を背景に持っている。品質論議が 1990 年代に活発化する前から、特に合衆国統計制度・政策の中での幾つかの関連論議をフォローしながら、また 1990 年代の ISI や IAOS などの国際会議と Q2001 会議への参加を経て、この考え方を固めてきた。案内を受けた Q2004 へは健康上の理由で参加を断念したが、要旨集と Proceedings はそれぞれ CD ロムで入手して一定の読みをしている。

しかし、本冊子でとりあげたサテライト会議は、国際統計機関の代表者たちの closed の会議だったようである。しかし、会議終了後間もないうちに会議に提出されたペーパーやまとめがウェブサイトを通じて参照できるようになった。この訳出は 2004 年の秋に企画し、進めたのだが、実際の発行は 1 年後の。Q2006 の案内がとどく時期になってしまった。

4. 訳者のそういった関心もあって、日本統計研究所の本参考資料では、No.61(1999)で Eurostat での論議を、No.79 (2002) で Q2001 の概要と総括的論文を紹介し、訳者自身の整理の論稿を掲載している。今回取り上げたのは、国際統計をとりあげた Q2004 のサテライト会議である。当然のことながら Q2004 の本会議にも注目しなければならない。これについては、本号に続いて、近いうちに紹介・論評する予定でいる。

5. 訳語、特に品質の次元などの大きいわばラベルに該当する訳語としてどの日本語をあてるかは、訳者にとって早くから大きな問題であった。今回あてた訳も暫定訳である。定訳が与えられれば有難いと考えている。次元を中心に一覧すると以下の通りである。

本資料での暫定訳	原語	説明
適合性	Relevance	適切性という訳語をあてたことがある。類似語として Fitness や suitability が登場する
正確性	Accuracy	
信頼性	Reliability	

信用性	Credibility	
適時性と定時性	Timeliness and Punctuality	Timeliness : 意味内容的には「速報性」を意味しており、この訳語をあてたことがある。 Punctuality : 「時間厳守性」の訳をあてたことがある。
周期性	Periodicity	何年あるいは何ヶ月ごとに調査あるいはその発表がおこなわれるか、である。
アクセス可能性	Accessibility	「利用可能性」という訳語が使われているし、訳者もこの語をあてたことがある。「入手可能性」という訳語もありうる。利用可能性はかなり一般的・抽象的であるとみなし、特にデータ・メタデータを獲得できる点に強調点をおいて、アクセス可能性とした。入手可能性だと、利用が容易であるかの含意を除外する可能性があると考えて避けた。
利用可能性	Availability	
明確性	Clarity	
比較可能性	Comparability	
解釈可能性	Interpretability	
両立可能性	Compatibility	
整合性	Coherence	「一貫性」という語も可能である。しかし、consistency and coherence という表現が良くでてくる。この二語を一括して一貫性と言っても良いが、consistency と訳し分けた。In-coherence は「不整合」とした。
一貫性	Consistency	「整合性」という訳もありうるが、Coherence と訳し分けた。「一貫性」という訳語の可能であろう。選択したこの一貫性という訳語は、標本推定値の特性として訳語をあてられている consistency = 「一貫性」と同じである。これは標本特性値が全体（多数回測定）を想定すると母数に一致する特性である。この違いを無視しての訳語選択になっているが、文脈で判断できるし原意も一致、不一致を問題にしていると受け止めた。この解釈から inconsistency は不一致とした。
高潔性	Integrity	この訳語をどうするかは今もお迷うところである。「正直性」という訳をみたことがあるが、原意を十分に汲み上げていないとみた。他方で情報セキュリティアドミニストレータ試験では、インテグリティを「完全性」とし、confidentiality=機密性、availability=可用性とともに情報セキュリティの3大要素の1つとしている。「情報システムにおける完全性とは、データの正当性、正確性、網羅性、一貫性を維持する機能」と言う説明がつけられている。試験において、「完全性」と記入すべきもの確定されてまでいる。しかし、「完全性」という語（訳）は、完全ということがありうるか、どんな次元あるいは要素についてなのかが問われない一般的な表現である。また統計の品質

		論では、このインテグリティの他に、正確性、アクセス可能性あるいは整合性・一致性が並べられている。ここでのインテグリティは政治からの独立性、不偏性、科学性等をふくむ。結局、これらの意味を体現するものとして、過去に訳者が使ったことのある「高潔性」に回帰してしまった（「自立性」の訳をあてたこともある【(1981)「統計の自立性と政策適合性」、『統計研究参考資料』No.6】）。
利便性	Serviceability	サービス可能性と言ってみても何のことかわからない。便利性もありうる。

6. 今日、統計の品質論でとりあげられている見地は、各国の政府統計活動の中に深く織り込まれてきている。国際機関・組織からの働きかけもあいまって、あるいは統計先進国では、それに先立って quality guideline を発している。各国の全統計活動が品質の角度からチェックされるのが常識化しつつある。

これらの動きに照らすと、日本では政府統計活動も論議も統計学も、統計品質論議に対しては比較的注目の度合いが少ないようにみえる。折からこの2004年から日本での統計改革論議が急速に進もうとしている。訳者は、国際的な統計品質論議における主要な次元や、それが指示する諸実践は、改革論議の際に基礎におかれて検討されるべきと考えている。さらに、社会・経済の諸問題をとりあげるといふ意味での（社会）統計学が、やはり統計品質論に注目し、摂取と批判を進めるべきと思う。

上に指摘したとおり、IMFをはじめとして国際各機関そして各国において統計品質論議とその実施が進んでいる点で、国際会議だけでなく、各国での取り組み自体も参照に値するものとなっている。素材は広く存在するといえる。

本資料が日本の統計活動や統計学の論議を進める上で幾分かの刺激になれば幸いである。

7. 本号は、翻訳、あとがき、をふくめて伊藤陽一が担当した。